

あだちがはら

## 新・安達原

能柄 夢幻能、女能、蔓物、優美にしつとりと、三番目物

素材 愛と罪の矛盾と葛藤を通した人間の醜さと美しさ

主題 女の深い愛が自らを鬼に変えてしまふ悲しさ

人物 シテ 女(鬼女)

ワキ 僧(山伏)

場面 陸奥国の安達原(福島県二本松市)の中秋

1 山伏 (次第、拍子に合わせて強く) 旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、  
露けき袖や萎るらん。  
つゆ そで しお

(名乗り、サラリと) これは諸国を廻る仏僧にて候。  
めぐ ぶつそう そうろう

2 地謡 「拍子に合わせて強く」

捨身行脚の 行体は、山伏修行の 姿なり。  
しゃしんあんぎゃ ぎょうたい やまぶししゆぎよう すがた

熊野巡礼 回国は、みな仏門の 慣いなり。  
くまのじゆんれい かいこく ぶつもん なら

3 山伏 「サラリと」ところで拙僧この間、心に立つる願あつて、  
かいこくあんぎゃ おもむ せつそう あいだ

回国行脚に赴かんと わが本山を 立ちいでて  
ほんざん た

4 地謡 「高い音域で謡う」 わが本山を 立ちいでて、  
き じかた しおのみさき

分け行く末は 紀の路瀉、潮岬を さし過ぎて、  
にしき おりおり たびごろも

錦の浜の 折々は、なお萎り行く 旅衣。  
かき ほじ しお

日も重なれば 程もなく、名にのみ聞きし 陸奥の、  
あだち はら つつ ほじ みちのく

安達が原に 着きにけり。安達が原に 着きにけり。  
あだち はら つつ あた

5 山伏 「サラリと」 困ったことに日が暮れて 辺りに人里もなく候。  
おやつ、あれに見えるは 火の光。  
こま ひかり ひとざと

立ち寄りて 宿を借らばやと存じ候。

〔作り物を覆った布が外され、中に座った里の女(鬼女)の姿が現われる。女は着座のまま、心の内をサラリと謡う。〕

6 女 「弱く拍子に合わせずさみしく歌う」 げに侘び人の 慣いほど、  
悲しきものは よもあらじ。

7 地謡〔弱く〕 かかる浮世に 秋の来て、 夜明けの風は  
身に沁めど、 胸を休むる こともなく、 今日も空しく  
暮ぬれば、 睡む夜半ぞ 命なる、これも定め の 生涯か。

8 山伏〔問答〕 御免くださいこれ。

9 女〔静かに〕 何方様でございますか。

10 山伏 われは回国の僧にて候。一夜の宿をお貸しくだされ。

11 女 あまりにも見苦しき庵にて、お宿はかないませぬ。

12 山伏〔掛ケ合、テンポ速く謡う〕 そこを何とか 主殿。  
見知らぬ土地に 行き暮れて、夜露を忍ぶ 陰もなし。

13 女〔静かに謡う〕 人里遠き この野辺の、  
松風寒く 吹き荒れる 芝の庵に、宿などと…。

14 山伏〔サラリと謡う〕 よしや旅寝の 草枕。  
今宵ばかりの 仮寝せん、ただただ宿を貸したまへ。

15 女 住み慣れし われにも憂さき この庵に、

16 山伏 ただ泊まらんと 柴の戸を、

17 女 さすが思えば 痛わしく

18 地謡〔上歌、高い調子で謡う〕 さらば留まり 給えとて、

戸ぼそを開き 立ち出づる。

異草交じる 茅筵、異草交じる 茅筵、

うた こよい し  
転てや今宵 敷きなまし。 強いても宿を 狩り衣、  
かたし そで つゆふか  
片敷く袖の 露深き、草の庵りの 忙しなき、  
たびね とこ  
旅寝の床ぞ もの憂き、旅寝の床ぞ もの憂き。

〔謡の終わりに山伏が目付柱の近くに杵杵輪に気づく〕  
わくかせわ

19 山伏 (問答)今宵のお宿 返す返すも有難うこそ候へ。  
こよい ありがと

ところであれば 見慣れ申さぬものにて候。  
みな

これは何と申したる物にて候ぞ。  
なに

20 女 はい。 それは杵杵輪とて、  
わくかせわ

われらのごとき 賤の女の 営む業にて候。  
しず め いとな わざ

21 山伏 懐しやな さらは夜なべに 営みて  
ゆか  
いとな

おん見せ給え よき業を。  
たま わざ

22 女 (弱く、拍子に合わせて謡う) げに恥ずかしや 旅人の、  
は

見る目も恥じず いつたなき、賤が業こそ もの憂けれ。  
しず わざ う

23 山伏 今宵留まる この宿の、主の情け 深き夜の、  
こよいとど あるじ なさ

24 女 月もさし入る  
い

25 山伏 閨のうち。 汗と涙が 輝きて 花の都の  
ねや かがや みやこ

舞よりも 労働く姿は 美しき。  
まい はたら すがた

26 地謡 (次第、拍子に合わせて謡いながら、女が杵杵輪で糸を繰る)  
まそお わくかせわ

真麻苧の糸を 繰り返し、真麻苧の糸を 繰り返し、  
まそお

昔を今に なさばやと。  
むかし いま

27 女 賤が績み麻の 夜までも、  
しず う そ

28 地謡 世渡る業こそ もの憂けれ。  
よわた わざ

29 女 (高い音調で嘆く) あさましや 人界に生を 受けながら、  
にんかい しょう

かかる憂き世に 明け暮らし、身を苦しむる 悲しさよ。

30 山伏

〔拍子に合わせず言い流す〕 どうかお嘆き 下さるな。

まず御体を 養えば、やがて花咲く 春も来よう。

31 地謡

〔淡々と〕 かかる憂き世に 永らえて、明けては暮れる

身なれども、命永らえ 心だに まことの道に 適いなば、

祈らずとても 終になど、仏果の縁と ならざらん。

地水火風が 纏わりて、 仮に暫く 人となり、

生死に輪廻し 六道を 巡るは心の 迷いなり。

若く綺麗な 人たるも、ついには老いと 成り果てる。

かほど儂き 夢の世を、なぜ厭わざる 糸車。

紡いで廻す 梓枳輪。

〔以下はロンギ、シテと地謡が拍子にのって、問答形式で交互に糸について謡う〕

京の五条の 辺りにて、夕顔の宿を 訪ねしは、

32 女

日蔭の糸(飾り糸)の 冠着し、それは源氏の 君やらん。

33 地謡

賀茂の祭りに 飾りしは、

34 女

葵鬘の 糸車(染糸で飾った牛車)

35 地謡

糸桜、色も盛りに 咲く頃は、

36 女

来る人多き 春の暮。

37 地謡

今はもう 穂出づる秋の 糸薄、

38 山伏

月に夜をや 待ちぬらん。

39 地謡

今また賤が 繰る糸の、

40 女

長き命の つれなさを、

41 地謡

思い明石の 浦千鳥、音をのみ独り 泣き明かす、音をの

み独り泣き明かす。

42 女〔問答、抑えて静かに〕いかに客僧殿、あまりに夜寒に

候ほどに、上の山に上がり木を採りて、

焚火をいたし候。しばらく御待ち候へ。

43 山伏 おん志は有難う候へども、夜陰と申し、

殊に女性のおん身として、思いもよらず候。

44 女 いや、私はいつも通いなれたる山路なれば苦しからず候

45 山伏 さらば直ぐにお帰り候へ。

46 女 のうのうわらはが帰らんまで、この閨の内ばご覧じ候うな。

47 山伏 心得申し候。見申す事はあるまじく候。

48 女 あら嬉しや構えてご覧じ候な。

〔念を押して女が退場する〕

49 山伏 …重ねて、心得申し候…。

50 地謡〔低く〕捨身行脚のその身にて、今さら女性の閨の内、

見ようと思うはずもなし。賢き女性と見受けたが、

謎をかけて身を隠し、長き時が経ちにけり。

〔鳴り物が続き、長い時間が経つ〕

51 山伏 はて？ 不思議やな、急に異臭が立ち込めり。

52 地謡〔テンポ速く、鳴り物激しく〕客僧やにわに

立ち上がり、閨の戸ぼそに手をかける。

たちまち壁が崩れ落ち、人の死骸が現れり。

哀れ妊婦は引き裂かれ、胎児は肝を抜き取られ、

膿血忽ち融できし臭穢は満ちて広がりて、

膚膩悉く爛壊す。いかさまこれは音に聞く、

安達が原の 黒塚に、籠れる鬼の 住処なり。

〔そこに薪を持った先の女が現れる。手に鬼女の面を持ち、顔に当てて激しい怒りを表す〕

53 女〔激怒〕あれほど固き 約束を 違えて閨を 覗くとは、  
高野聖は 名ばかりの 生臭坊主よ、えーい 覚悟せよ！

54 地謡 (クリ、拍子に合わせず、強く) 胸を焦がすは 恨みの炎  
咸陽宮の 火のごとく 煙紛々 巻き上がり、  
野風山風 吹き落ちて、 雷 稲妻 天に満ち

空かき曇る 雨の夜の、 鬼のごとくに 口を開け  
今一口に 喰わんとて、 歩み寄りたる 足の音、  
振り上げたるは 鉄杖の 勢いあたりを 払いけり。

55 山伏〔印を結んで、無言で蹲る〕……。〔そこを鬼女が打つ〕  
56 女 ムム・なぜ逃げぬ……、〔鬼女、拍子抜けして歌う〕

物言わぬ 声なき声が 胸を刺す 月の光が 闇射すごとく。  
57 地謡〔山伏の気持ちに謡う〕恥を忍んで 宿を貸し、真麻苧の糸を  
繰り返し、この寒き夜に 焚木取る。その心根を 思うとき、

後ろ足で 砂をかけ、 どうして逃げて 行けようか。  
焚木取る その心こそ 焚火より なお暖かき この庵から。

58 山伏〔覚悟して問う〕そなたに詫びる 言葉もなく候……。  
ところで、閨に眠れる この人は……。

59 女 ううう……。 わが娘子と その子なり。

60 山伏 やはり然様で あったのか。

61 地謡 愛しき姫を 忖度し、 易者の言を 真に受けて、  
旅の親子を 手にかけて その生き胆を 抜き取れど、

身に着けていた お守りが わが子のもと  
気がつけば 気が狂わずに おれようか。

62 女 惨い定めにごごいます。(泣き崩れる)

63 山伏 「低く、強く」 いかにも天は無情なり。

64 地謡 「カ強く激情を込めて謡う」

天が無情で あるならば、 せめて人こそ 有情なれ。

夜が寒くて 辛ければ 人の心で 暖めて、

天が見捨てし この人を、 救えぬまでも 寄り添わん。

己の愛が 深すぎて、 ついには鬼と 成り果てし、

安達が原の この人に…。

〔祈り〕 東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、

西方に大威徳明王、 北方に金剛夜叉明王、

その真ん中に 明々と 大日大聖 不動明王、〔印を結ぶ〕

65 山伏 「カ強く語る」 百八の 煩惱束ねた この数珠で

摂受いたさん この人を。

〔真言を唱え、数珠を弄る〕 おんころころ せんだりまとうぎ

おんあびらうんけんそわか、 うんたらたかかんまん。

66 地謡 「低い声でゆっくりと、太鼓に合わせて不動明王の本誓の偈文から」

見我身者、発菩提心、聞我名者、断悪修善、

聴我説者、得大智慧、知我心者、即身成仏。

その昔、 忬度したる 母親が、 わが子の餓死も

泣けぬのに、 帝の御子の 病とて 声張り上げて 泣きにけり。

桜さくら咲くうつく 美うつくしすぎる 日ひの本もとの 光ひかりりの届とどかぬ その陰かげに  
忘わすれられし 魂たましいが 涙なみだに濡ぬれて 籠こもれけり。

神かみと仏ぶつに 見み捨てられ、異い界かいをさ迷まよう 魂たましいを、  
回かい国こく行あん脚ぎゃに 赴おもむきし 心こころに立たつる 願がんにより、

67 山伏さんぶつ 「カ強く」人ひとたるものが 訪たずねずば、

誰たれがこの世よを 救すくうべき。

68 女むすめ 「鬼面おにづかみが落ち、ゆったりと静しずかに歌うたう」訪とぶらわれ 神かみも仏ぶつも  
知しらぬ身みが 人ひとの心こころの 慈じ悲ひを知しりけり。

69 地謡ぢうぎ 「女むすめが去さって、爽さわやかに朗ろう々と、ゆったり歌うたって締しめる」

冷つめたき夜よるが 今いま明あけて 重おもたき霧きりが 晴はれにけり。

悔くい改あらためし 罪つみよりも なお美うしき ものぞなし。

安あ達だちが原はらに 風かぜが吹ふき 先さきの庵いおりも 消きえ失うせて

黒くろ塚つか一つ 残のこりけり。 何なにの縁えにしか 知しらねども

花いちりん一さ輪りんが咲さきにけり ただ一いち輪りんが咲さきにけり。

完

寺田誠知 改